形容詞の装定における意味的特徴 —「難しい」を中心に—

楊 婧 瑋

キーワード:形容詞、装定、述定、転換可能性

要旨

本論文では、「難しい」を中心に、形容詞の装定における意味的特徴について考察を行い、形容詞の装定における実際の意味から、名詞を分類し、形容詞と名詞との意味的な関わりを究明して、装定から述定への転換可能性を考察した。その結果、「難しい」の装定における意味は、「物事の性質・属性」「人の心理的な態度」と「人の心理状態・性格」がある。その中、「物事の性質・属性」は名詞の内包している性質・属性であり、装定から述定へ転換できるもの、「人の心理的な態度」と「人の心理状態・性格」は名詞の内包している性質・属性ではなく、装定から述定へ転換できないものと考えられる。

1. はじめに

筆者はこれまで、形容詞の装定における意味的特徴について考察を行い、形容詞の装定における意味的特徴、即ち、形容詞の装定と名詞との意味的な関わりから、装定から述定への転換可能性を中心に論じてきた。考察の結果、①形容詞の装定に、仁田(1980)の指摘する「名詞の内包している性質・属性を表す場合」以外に、「名詞の内包している性質・属性を表していない場合」、即ち、「特徴づけ」と「関係」といったような、話し手に左右される場合も存在すること、②形容詞の装定における意味的特徴と装定から述定への転換可能性との関わりに関しては、形容詞が名詞の内包している性質・属性を表しているかどうかによって、装定から述定への転換可能性も変わること、即ち形容詞が名詞の内包している性質・属性を表す場合は、装定から述定へ転換できるが、形容詞が名詞の内包している性質・属性を表していない場合は、装定から述定へ転換できない、といった2点が明らかになった。

筆者はこれまでの研究を踏まえ、形容詞の装定における意味的特徴にさらに考察を加え、形容詞の装定と名詞との意味的な関わりについて分析、分類しようと思う。なお、本論文で扱う形容詞はいわゆる属性形容詞に限定する。

2. 先行研究

楊(2014)では、「新しい」を対象に、形容詞の装定から述定への転換可能性をめぐって、形容詞の装定における意味的特徴、即ち、形容詞の装定と名詞との意味的な関わりについて考察を行った。以下の例を参照されたい。

(1)人の増え続ける町に、また新しい建物がいくつか建ち始めている。(稲葉真弓『抱かれる』, 1993)
(2)今までになかった、まったく新しい機能を持った商品がヒットすると、普通、一番早く世に出た商品名がまず浸透してしまう。(星野匡『すぐ役に立つネーミングの本』, 1991)
(3)来月から、新しい仕事が決まりました。決まった時はすごく嬉しかったのに、いざ入社日が近づいてくると、だんだん不安になってきます。(Yahoo!知恵袋, 2005)
(4)内容はほとんど同じでも毎年のように新しい本を出版します。これは新刊本だと本屋の目立つコーナーに置いてもらえるメリットがあるからだそうです。(江部康二『Dr. 江部のアトピー学校』, 2001)
(5)しかしアメリカは、インディアンの文化は無視しましたから、アメリカの文化といえば、それは移民たちの出身地の文化を、そのまま延長したものとなるわけです。そうなると、そこから独自の新しい文化を生み出していくのは簡単ではありません。(藤沢孝之『旅する視点』, 2005)
(6)故きを温ねて新しきを知る。昔のことをよく学ぶことによって新しい価値や道を発見すること。(村松暎『「四字熟語」読む辞典』, 1996)
(7)ちょうどこの時期、新しい家族が二匹、増えた。啓子がモモを散歩させているとき、近くのゲートボール場で生後二か月ほどの子犬二匹が捨てられているのを見つけ、「三匹も四匹もおんなじだから」と、連れて帰ったのだ。(香取章子『ペットロス』, 2004)
(8)これから、どう生きようか。新しい時代が待っていそうな予感がする。(江宮隆之『風のささやき』, 2004)

仁田(1980:239)では、名詞の内包している性質・属性は、「物」が内在的に有している特徴であり、「物」が存在する時に帯びる外在的な特徴は、名詞の内包している性

質・属性ではないと指摘されている。従って、上記の(1)から(4)の「新しい」は、「新しい建物」「新しい機能」「新しい仕事」「新しい本」の中に用いられて、「ある状態になったばかりである」「今までにはなかったものである」「今までの物事とは違っている」「物事ができたばかりである」といった意味を表して、「建物」の状態、「機能」の特質、「仕事」の内容、「本」の状態という「物」が内在的に有している特徴であり、名詞の内包している性質・属性を表していると言える。また、上記の(5)から(8)の「新しい」は、「新しい文化」「新しい価値」「新しい家族」「新しい時代」の中に用いられて、「今までの物事とは違っている」「今までにはなかったものである」「物事ができたばかりである」「今までの物事とは違っている」といった意味を表している。が、「新しい」は、具体的な「文化」「時代」の内容や物事の「価値」の本質を意味するのではなく、話し手の抽象的な意味をもつ「文化」「時代」と「価値」に対する「特徴づけ」と考える。そして、「新しい家族」の「新しい」は、「家族」の状態を表しているのではなく、「話し手が「家族」との関係の成立してからの時間が短い」という意味を表していて、「物」が存在する時に帯びる外在的な特徴であり、「家族」の内包している性質・属性ではない。

このように、「新しい」の装定における意味的特徴について考察を行うと、形容詞の装定には、仁田(1980)の指摘する「名詞の内包している性質・属性を表す場合」以外に、「名詞の内包している性質・属性を表していない場合」、即ち「特徴づけ」と「関係」といったような、話し手の主観に左右される場合も存在することが明らかになった。そして、形容詞の装定の意味的特徴と、装定から述定への転換可能性との関わりについて以下のことが言えるだろう。形容詞が名詞の内包している性質・属性を表す場合は、装定から述定へ転換できるが、形容詞が名詞の内包している性質・属性を表していない場合は、装定から述定へ転換できない。

本論文では、上記の考察結果を踏まえ、形容詞の装定における意味的特徴をめぐってさらに研究を進めて行きたい。具体的には、以下の2点を明らかにしたい。

①形容詞の装定における実際の意味から、形容詞の装定と名詞との意味的な関わりをさらに分析、分類する。

②上の①の考察を踏まえ、形容詞の装定から述定への転換可能性を考察し、形容詞の装定における意味と、装定から述定への転換可能性との関わりを究明する。

3. 研究対象と用例収集

考察にあたり、本論文では、「難しい」を取り上げる。その理由として以下の3点をあ

げる。

(1)「難しい」は、「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」に12404例が採録されており、使用頻度が高い形容詞であると考えることができる。

(2)多義語である。

(3)属性形容詞ではあるが、評価や態度を含意することが多い。そのため、形容詞の装定と名詞との意味的な関わりについては、「名詞の内包している性質・属性を表す」用法以外に、「名詞の内包している性質・属性を表していない」用法の用例が多く集められると考えられる。

3－1. 量的な分析

「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から取り出した「難しい」に関する12404の用例の中には、以下の(9)と(10)のような「難しゅう」「難しげ」などを用例も33例が見つかったが、今回は、これら形態の異なる用例は考察の対象外とする。

(9)鹿の子は縫わずに小さく絞りますが、これは粒を揃えるのが大変なことで、いちばん難しゅうございます。(桑井いね『続・おばあさんの知恵袋』, 1977)

(10)どうやら半分ぐらいは理解しながらこんな難しげな本を読んでいたらしい。5年ちかく担当してもらって初めて知る真実である。(山崎マキコ『アスキー』, 2002)

上記の33例を除くと、本論文で扱う「難しい」の用例は、計12371例になる。用例を機能ごとに分類して、以下の表1に示す。

表1

	用例数	割　合
装定用法	3350	27.08%
述定用法	7696	62.21%
「難しさ」の用法	434	3.51%
連用用法	891	7.20%
計	12371	100.00%

表1から分かるように、「難しい」は述定の例が装定の例の倍以上見られる。仁田(2010:338)では、「装定を本領するという形容詞のあり方は、属性形容詞にこそ当て

はまり、ある意味で、感情・感覚形容詞は、動詞への近さを有する」と指摘されている。つまり、属性形容詞は装定を中心として用いられるが、感情・感覚形容詞は、述定を中心として用いられるということである。そうすると、「難しい」は、属性形容詞でありながら、物事に対する評価や態度の意味が強いため、感情・感覚形容詞の用法に近く、述定の例が多く見られると考えられる。

3－2. 辞典の解釈

用例分析に入る前に、「難しい」の意味の大枠を参照されたい。(以下は『新明解国語辞典』から引用したものである)

むずかしい【難しい】(形)「むつかしい」とも
適切な対処の方法が見つからないことが多くて、容易に解決(克服)することができない状態だ。
「判断が難しい」「古文の解釈は難しい」「難しい立場だ」
「難しい〔=気むずかしい〕人」「難しい〔=複雑でわずらわしい〕手続き」
「難しい〔=治療が困難な〕病気」「難しい〔=深刻そうな〕顔をしている」
〔大部分の用法の対義語は、「易しい・たやすい」〕派－さ　－が・る

上記の引用から分かるように、「難しい」は、名詞によって、物事の性質・属性(「難しい病気」「難しい手続き」)、人の心理的な態度(「難しい立場」)、基本的な意味から離れる人の心理状態・性格(「難しい人」「難しい顔」)などを表す。

4. 用例分析

用例の分析を通して、「難しい」の装定における意味と名詞との関わりを分類するため、本節では、使用頻度が3以上の名詞を取り上げる。ただし、「もの」「こと」「ところ」「点」「面」「側面」「感じ」「印象」など文脈によって意味の内実が揺れる主名詞を除く。その結果、今回分類の対象となる名詞は76語であり、用例は1269例になる。具体的には、以下の表2に示す。

表2

	「難しい」の装定における意味合い	名詞
物事の性質・属性	1.「理解するのが困難である、わかりにくい」	言葉、話、歌詞、本、曲、言い方、説明、文章、理論、作品、知識、観念、単語、内容、漢字、歌、字、名前、理屈、専門用語、議論、分野、漢語、領域、テーマ　(計25語)
	2.「解決しにくい、容易でない」	条件、勉強、症例、問題、質問、プロジェクト、課題、ケース、事件、試験、交渉、ゲーム、病気　(計13語)
	3.「複雑である、容易でない」	判断、選択、仕事、技術、手術、計算、操作、コース、作業、修行、手続き　(計11語)
人の心理的な態度	1.「現状を打開することが困難である、解決しにくい」	立場、時代、時期、現状、現実、時、環境、局面、状態、状況、関係　(計11語)
	2.「実現が困難である、成功しにくい」	資格、戦い、試合、役所、役、角度、場所(計7語)
人の心理状態・性格	1.「深刻そうな」	顔、顔つき、表情　(計3語)
	2.「気むずかしくて、扱いにくい」	人、相手、子供、患者、年頃、年齢　(計6語)

4－1．物事の性質・属性

「難しい」は、物事の具体的な内容に対して、その性質・属性を表している。名詞の内包している性質・属性であり、装定から述定へ転換できるものと見られる。

4－1－1．「理解するのが困難である、わかりにくい」

主名詞には、「本」「文章」「漢字」「テーマ」などのような具体名詞が多く見られる。そして、「難しい」は、主名詞の内容、意味などに対して「理解するのが困難である、わかりにくい」という「物」の内包している性質・属性を表している。以下に例を示す。

(11)また、プレゼンテーションなどでは、最初にニコッと満面の笑みを浮かべることも効果があります。特に難しい話をするときには重要です。自分もリラックスしますし、相手もよい印象をもちます。(小杉俊哉『キャリア・コンピタンシー』, 2002)

(12)その場合、よくわからないところはとりあえずボンヤリした理解にとどめ、そ

こはカッコに入れて先に進んでしまうのがいい。—これが少しむずかしい本を読むときのいちばんのコツである。(立花隆『脳を鍛える』, 2000)

(13)「球磨焼酎とIC(半導体)の関係、肥後猛婦というような女性の力、阿蘇のきれいな伏流水…地域開発と地方文化をめぐるテーマをどう理論づけていくか、難しいが楽しいテーマでもあります。あまりまじめに、がんじがらめになるのでなく、やわらかく楽しくやる方法があると思う」(山本雄二郎『東京ルネサンスと熊本・神戸の挑戦』, 1986)

4－1－2.「解決しにくい、容易でない」

主名詞には、「質問」「問題」「事件」「試験」など解答や解決を要する問い、または事柄などを表す抽象名詞が多く見られる。そして、「難しい」は、名詞の内容に対して「解決しにくい、容易でない」という「物事」の内包している性質・属性を表す。以下の例が挙げられる。

(14)気密性を高めて隙間風や部屋が冷えるのを防ぐためです。このために、ひとつ難しい問題がありました。部屋から外部への出入りの戸口です。(中柳美恵子『輝きの日々のために』, 2002)

(15)コントロールがうまくいかない患者さんでは関節の破壊が進みます。このように難しい病気の一つですが、薬物療法の進歩により社会生活を続ける人が増えています。(井上肇監修;高山美治『ひざの痛みをとる・治す』, 2000)

(16)いったん失った信用を取り戻すには時間がかかるし、犯人を一人逮捕したからといって何がどう変わるものでもない。しかし、こんなときだからこそ、黙って難しい事件に取り組むしかない。地道に事件を一つ一つ解決していけば、いつかまた信頼を回復できる。(龍一京『時効捜査官』, 2000)

4－1－3.「複雑である、容易でない」

主名詞には、「作業」「技術」「仕事」「選択」などの抽象名詞が多く見られる。そして、「難しい」は、名詞の表す事柄の内容、プロセスに対して「複雑である、容易でない」という「物事」の内包している性質・属性を表す。具体的には、以下の例のようである。

(17)お釣りは大概、大きい紙幣、レシート、小銭の順に下から重ねて手渡される。そ

れを財布に入れるのは意外と神経を使う難しい作業だという。(E&Cプロジェクト『バリアフリーの店と接客』, 1999)

(18)接ぎ木はむずかしい技術である。また、必要苗数が少ないのに用意する資材も必要となり、大変である。(稲山光男『まるごと楽しむキュウリ百科』, 1992)

(19)とはいっても、おそらく清水の代表作を一本だけあげるとすれば、彼はさまざまなタイプの作品を撮っているので難しい選択となるが、『蜂の巣の子供たち』をあげる人がすくなくないと思う。(貴田庄『小津安二郎と映画術』, 2001)

4－2. 人の心理的な態度

「難しい」は、物事に対して話し手が心理的に「困難である」と感じていることを表す。名詞の内包している性質・属性ではなく、話し手の主観に左右される、物事に対する「特徴づけ」と考える。そして、装定から述定へ転換できない。

4－2－1.「現状を打開することが困難である、解決しにくい」

主名詞には、「状態」「現実」「環境」「立場」「時期」などの抽象名詞が多く見られる。そして、「難しい」は、話し手が名詞に対して、「現状を打開することが困難である、解決しにくい」という心理的な態度を表している。つまり、名詞の内包している性質・属性ではなく、話し手の主観に左右される、物事に対する「特徴づけ」である。これは以下のような例に見られる。

(20)この前、そのことについて訊ねた時、万次郎ははっきりとは自分の意見を言わなかった。それは、いま万次郎自身が難しい立場にいるからだと察せられた。(満坂太郎『海賊丸漂着異聞』, 2005)

(21)欧州の金利政策は難しい局面を迎えている。(Yahoo!ブログ, 2008)

(22)これから先のことを考える際に、何かアドバイスがあればお願いします。彼をとるか新しい人をとるか両方失うか…難しい時期ですよね。でも、自分が好きな人を選ぶのが一番良いと思う。(Yahoo!知恵袋, 2005)

4－2－2.「実現が困難である、成功しにくい」

「難しい」が、「資格」「戦い」「試合」「役」などを修飾、限定する場合には、その名詞が予想する一定の結果を得ることが困難であるという意味を表すが、「場所」「角度」な

どを修飾、限定する場合には、その名詞の表す事柄に対して、特定の結果を得るのが困難であるという意味を表す。名詞の内包している性質・属性ではなく、話し手のある目的に対して「実現が困難である、成功しにくい」という主観に左右される、名詞に対する「特徴づけ」と考える。

(23)難しい資格ではないのでちゃんとやれば取れますし、勉強している過程でためになることもあるので興味も湧きやすいと思います。(Yahoo!知恵袋, 2005)
(24)覇気のない少年がさまざまな冒険を通して成長し、夢と希望を持つことの素晴らしさを知るという難かしい役どころを熱演。(広報あつぎ, 2008)
(25)紛失してから二か月も探しつづけて発見されないようなそんな難しい場所がホテルの客室にありますか。(森村誠一『異型の街角』, 1986)

4－3. 人の心理状態・性格

「難しい」は、「適切な対処の方法が見つからないことが多くて、容易に解決(克服)することができない状態だ」という基本的な意味から離れて、「顔」「人」「年頃」などの名詞を修飾、限定すると、「深刻そうな顔つき」「気むずかしくて扱いにくい」といった「人の心理状態・性格」を表す。名詞の内包している性質・属性ではなく、人間の表情や性格などに関して、話し手の主観に左右される「特徴づけ」と考える。この場合、装定から述定へ転換できない。

(26)「だから結城君にも、その点はよく含んでいてもらいたいな」小室は難しい顔で言った。(清水一行『派閥渦紋』, 1994)
(27)要は妻側の認識と態度如何だったのかもしれません。海軍時代の夫は、私にとっては難しい人、優しくない人という印象がどうしても強いのです。(立田正雄『心晴朗なれど波高し』, 2003)
(28)遊んだり、眠ったりする子供を、ひとりで部屋に託した時間は大きかった。この部屋の内側で、小さな息子が少年になり、その難しい年頃のこころもからだも形成されていったのである。母親のわたしが部屋に子供を預けて、遊んでいる間に育ってしまったような気がした。(短歌, 2003)

4－4. 転換可能性

前節までの分析から分かるように、「難しい」の装定における意味と、装定から述定への転換可能性との関わりについては、「難しい」が「物事の性質・属性」を表している場合には、装定から述定へ転換できるが、「人の心理的な態度」や「人の心理状態・性格」を表し、名詞の内包している性質・属性ではない場合には、装定から述定へ転換できないものと見られる。一般に、「難しい」は基本的な意味から離れると、名詞の内包している性質・属性を表せなくなる。本節では、「難しい顔」をめぐって、装定から述定への転換可能性をさらに考察する。まず、以下の例を見てほしい。

(29)学校は本当に楽しかった。新しい友達もすぐにできた。(木原梨沙子『わたしから『私』へ』, 2002)

(30)ロンドンと日本の時差は九時間、いま東京は午前六時過ぎだった。思えばいちばん悪い時刻だった。(『消されたスクープ』, 1993)

筆者のこれまでの研究では、(29)と(30)の「新しい友達」と「悪い時刻」は、「新しい」と「悪い」がそれぞれ「友達」と「時刻」の内包している性質・属性を表していないため、一般的に「友達が新しい」と「時刻が悪い」へ転換できないものと考えてきた。しかし、特定の場面が設定されると、例えば、「たくさんの友達の中では」、「いろんな異なる時刻の中では」などのような、ある範囲が特定されるとなると、「この新しい友達」と「この悪い時刻」から「この友達が新しい」と「この時刻が悪い」へ転換できるようになる。つまり、主語である「友達」と「時刻」が特定の範囲の中で現れる場合には、「新しい」と「悪い」は、それぞれ「友達」と「時刻」の装定と述定の両者で使われるようになる。

寺村(1991:264)では、「形状・特徴を描く形容詞は、連体修飾的に使われたときは、被修飾語である名詞の、他の同種のものと比べての特徴を述べるのに(つまり範囲限定の品定めに)使われるのが普通である。文の述語としては、そのような使い方もあるが、たんにそのときの話し手の対象、状況についての印象を表す言い方もある」と述べている。つまり、形容詞の装定は、「範囲限定の品定め」の用法を表し、述定は「印象描写」の用法か「範囲限定の品定め」の用法かを表すと指摘している。そして、寺村(1991)の指摘する形容詞の述定は、「範囲限定の品定め」の用法と「印象描写」の用法が必ず「特定の範囲や対象」を主語にしなければならないという。従って、(29)と(30)の例については、「友達が新しい」、「時刻が悪い」などは、一般的に特定の範囲や対象

を表していないので言えない。が、「たくさんの友達の中では」、「いろんな異なる時刻の中では」などのような、ある範囲が特定される場合となると、言えるようになる。また、以下の例を参照されたい。

(31)「それと、課長―」片山が栗原に、田所由香と祖父のことを話して、「あの子を何とか保護してやりたいんです」栗原は難しい顔で考え込むと、「それは大変だぞ。(後略)」(赤川次郎『三毛猫ホームズの仮面劇場』, 2005)

(31)の「難しい顔」は、「深刻そうな顔つき」という意味であり、「顔」の異なるあり方の中から一つを取りあげて、それに対する特徴づけを表している。そして、「難しい顔」の「難しい」は、一般的に装定から述定へ転換できないものと考えられる。それに、「この顔が難しい×」とか、「彼の顔が難しい×」などのように、特定の範囲や対象が設定される場合でも、「難しい」は「顔」の述定に使われないものであるため、装定にしか使われないと言える。このように、「難しい顔」は、「新しい友達」や「悪い時刻」とは、装定から述定への転換が違っているものと思われる。

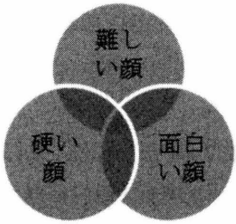
「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から抽出した「難しい顔」に関する69の用例の中に「難しい」が「顔」の述定になる例はなかった。以下に用例を示す。

(32)審査員席には、すごい緊張感がはりつめていた。みんな、難しい顔をして無言でいる…。(喜多嶋隆『ダウンタウン・エンジェル』, 1992)

(33)「それには、ふかあいわけがある」わざとむずかしい顔を拵えた俊造が、おどけた調子で答えた。あたかも、小さな子をあやす親のようだった。(山本一力著『赤絵の桜』, 2005)

上記の(32)と(33)のように、「難しい顔」の「難しい」は、「深刻そうな顔つき」という意味であり、他の顔と比べての特徴を表しているのではない。そして、顔の異なるあり方の中では、例えば、「難しい顔」「硬い顔」「面白い顔」などがあって、それぞれはっきり分けられないものと考えられる。図で表すと、以下のようになる。

図1



この場合、「難しい顔」と対立する「難しくない顔」は存在しない。つまり、「難しい顔」の「難しい」は、対立する意味をもたない独特のあり方なのである。従って、対立項が存在しないわけだから、特定の範囲が限定されないということになる。「新しい友達」や「悪い時刻」の「新しい」と「悪い」は、他と区別するあり方がはっきり示されていないため、一般的に装定から述定へ転換できないが、「難しい顔」の「難しい」が「この顔が難しい×」などのように、特定の範囲や対象が設定される場合でも「顔」の述定に使われないということは、「難しい顔」と対立する「難しくない顔」が存在しない、つまり、「難しい」と対立する意味が存在しないため、特定の範囲が限定されないという点に理由を求めることができる。「難しい顔」の他に、こういったあり方をするものに、「難しい年齢」と「難しい年頃」などが挙げられる。

5. まとめ

本論文では、「難しい」を対象に、形容詞の装定における意味的特徴について考察を行い、形容詞の装定における意味から、名詞を分類して、形容詞と名詞との意味的な関わりを究明した。そして、形容詞の装定における意味と、装定から述定への転換可能性との関わりについても考察した。結果は以下の2点にまとめられる。

(1)「難しい」の装定における意味から、形容詞と名詞との意味的な関わりを「物事の性質・属性」「人の心理的な態度」と「人の心理状態・性格」に分けられる。その中、「物事の性質・属性」は名詞の内包している性質・属性であり、「人の心理的な態度」と「人の心理状態・性格」は名詞の内包している性質・属性ではない。つまり、「難しい」は、基本的な意味から離れると、名詞の内包している性質・属性を表せなくなる。

(2)「難しい」の装定における意味は、「物事の性質・属性」を表す場合に、述定へ転換できるが、「人の心理的な態度」や「人の心理状態・性格」を表す場合に、一般的に

述定へ転換できない。それに、「人の心理的な態度」や「人の心理状態・性格」を表す場合に、「難しい」は、対立する意味が存在しなければ、主語が特定の範囲や対象が設定される場合でも、述定に使われない。

参考文献

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
仁田義雄(1980)「「多イ」「少ナイ」の装定用法」『語彙論的統語論』, 233 – 250, 明治書院
仁田義雄(2010)『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房
楊　婧瑋(2014)「形容詞の属性と装定から述定への転換可能性との関わりについて」『国語学研究』, 第54集

参考辞書

『新明解国語辞典』第六版三省堂/『大辞林』第三版三省堂

– 東北大学大学院生 –